

第3章 国際交流

長沙市の研修医受け入れ

昭和53年8月、日中平和友好条約が結ばれた。鹿児島は中国大陸と近く、鑑真和上や遣唐使船など歴史的な関係も深いことから、中国との交流を求める機運が広がる。56年11月、鹿児島市の各界代表らが中国の各都市を訪問するなど友好ムードは一気に上昇。こうしたなか、湖南省の省都で人口約120万人超の長沙市から、鹿児島市に友好都市締結の申し入れがあり、先遣視察団が鹿児島市を訪れるなど交流がスタートし、57年10月30日、友好都市を締結した。

翌年から交流が活発化。10月には鹿児島市友好団が友好都市締結1周年記念式典に臨むため、長沙市を訪問した。団長の山之口安秀市長が交流の8項目を提案。12月、鹿児島市を訪れた長沙市友好訪問団が、山之口市長の提案のうち4項目について実現可能の意向を明らかにした。その第1に掲げられたのが「市立病院への研修医受け入れ」だった。

翌59年11月末、友好都市締結2周年を機に、長沙市第4医院の趙国祥チョウコクシャウ医師（42歳）と同市口腔医院の何国強カクキョウ医師（31歳）が来鹿。趙医師が循環器科、何医師が歯科のほか鹿児島大学附属病院などで約9カ月間研修を積んだ。2人とも、予想以上に検査・治療施設が優れていることに驚嘆する。一方、趙医師は、鍼しん

灸医学の実態を報告し、石神稔朗循環器科科長は「日本以上にしっかりとした信念を持ち、病態をつかんでいることに驚いた」と話した。帰国を控え、両医師は「研修の目的はほぼ達成できた。温かく迎えてくれた市民に心から感謝している。お陰で医療をはじめ得たものは大きい。先進技術紹介はもちろん、両市の友好を高めるよう努めたい」と語った。

昭和60年11月、2度目の受け入れとして長沙市第3医院の符嶺華医師（46歳）と長沙市口腔医院内科の余署純医師（39歳）の2人が来鹿した。符医師は循環器科が専門でこの道23年。余医師は歯科15年のベテランで日本語は日常会話をこなせる。2人は6カ月間の研修期間中に「日本の優れた医学の制度や機器のほか、生活習慣など多くのことを学びたい」と抱負を語った。

以降、長沙市からは平成5年まで毎年2人ずつ医師や看護師など研修生が訪れ、10年間、20人が市立病院を中心に研修し、多くの研修生が、感激と感謝の言葉を残して鹿児島を後にした。

（第3回から10回までの研修生は次の通り）

第3回（61年7月）何小平、唐元萍▽第4回（62年2月）王一欣、陳斉国▽第5回（62年10月）
黄関、張艶青▽第6回（63年7月）馮飛、孫長立▽第7回（平成元年10月）載月梅、張憲南▽第8回
（平成2年11月）彭敏球、謝宏▽第9回（平成4年1月）張莉、王敏▽第10回（平成5年4月）黄
紅光、王西香（敬称略）

この間、市立病院からも長沙市を訪問し、医療関係者らとの友好を深めた。61年、時任純孝院長を団長

とする友好訪問団4人が、7月28日から8月4日までの日程で訪れ、長沙市の医療関係者らと交流した。また63年9月28日から10月9日まで、大司淑子総看護師長を団長に、唐仁原道子中央回復室看護師長、内山好美6階西病棟同、有村京子4階病棟同、町田由紀子3階病棟同の5人が長沙市を訪問した。現地では、市立病院で研修した何小評医師も案内役で同行、湖南医学大学附属第一病院など4病院を視察。看護師同士の座談会にも出席し、大司総看護師長が「日本と鹿児島市立病院の看護の現状」について講演した。さらに北京や上海の病院も見て回り、中国の看護、医療の現状を学んだ。

唐仁原道子看護師長は、帰国後「ナースの立場として、どの国の人も患者さんの回復を祈って一生懸命努力しているのだということ強く感じた。中国のナースたちは、大勢の見学者の前でも臆することなく堂々としており、自信と誇りを持って看護業務を行っているようだった。そして礼儀正しくて親切、また意欲的に新しいものを吸収しようとしているという印象を受けた」と振り返った。